今月のテーマ：暑い夏に思うこと

2025年8月　Vol.33 No.8

環境と文明

認定NPO法人 環境文明21会報

風

ドイツの記憶：過去・現在・未来のトレードオフ

杉浦　淳吉

ドイツ・シュツットガルトで開催された国際シミュレーション＆ゲーミング学会（2025年7月）に出席してきました。これが31回目のドイツ訪問ですが、改めて私にとってのドイツ訪問を紹介させてください。

はじめてドイツに出かけたのは2002年8月、共同研究の一環でフライブルクやカールスルーエなど「環境先進都市」の事例調査でした。カールスルーエでは市の中心部で路面電車の地下化が問題となっていました。郊外からの鉄道列車が路面電車に乗り入れてくる先進的モデルは、鉄道利用者にとって便利である一方、市の中心部の路面を電車が列をなして渋滞するため、通りを往来する人々の安全性の問題が生じます。他方、地下化の工事を行えば多額の予算がかかるだけでなく、長い工事の間、市中心部での不便さを受け容れないといけません。2003年に300名ほどの市民に対してアンケート調査を実施し、市民が環境政策を受容する上で、行政の政策導入手続きが公正であることが重要なことなどを明らかにしました。地下化の工事は2010年頃にはじまり、工事の長期化や費用の増大を抱えながらもプロジェクトは完了したようです。

後にドイツのノイス市でも、市の中心地での路面電車の存続か移設かをめぐる論争など、市民参加が絡んだ賛否が拮抗する事例について2008-09年に調査を行いました。結果的には、狭い通りを走る複線の路面電車を単線にする折衷案で計画が実行されることになりました。

私にとっての2回目のドイツ訪問は2003年1月でした。当時、名古屋地域において市民参加による循環型社会の創生をめざす社会実験が計画され、その準備の一環で欧州での市民参加の先端的事例の調査を行いました。シュツットガルトはその一つで、シュツットガルト大学のレン, O. 教授を訪ね、インタビューを行いました。この時は、藤村コノヱさんと初めてご一緒させていただいた調査でした。市民参加の具体的な技術を学び、今となっては常識となっている知見ではありますが、マニュアルとして成果をまとめ、名古屋での市民参加の社会実験に活かすことにつな

がりました。

今回の学会会場は当時訪れたシュツットガルト大学社会学部に近く、22年前は季節も冬で雰囲気は対照的ですが、市内の地下鉄が地上に上がってくる風景をみて、当時の記憶が呼び起こされました。当時シュツットガルト中央駅に到着したのは夜の暗い時間帯でしたが、到着後に駅舎で立ちながら夕食として軽食を買って食べながら、まず自分たちの合意形成をはかれるようにしよう！といった話をしていました。

さて、上述のように2008年に共同研究で再び欧州での環境計画に絡む係争事例の調査を計画し、このシュツットガルト中央駅も調査候補地の一つとして選定し、2度目の訪問となりました。Stuttgart21というプロジェクトについて、賛成派、反対派、工事主体のドイツ鉄道に対してインタビュー調査を行いました。シュツットガルト中央駅は通過型ではなく、入ってきた列車が向きを変えて出ていくタイプの駅です。欧州の都市間を高速で結ぶ鉄道ネットワークのために、この駅を地下化し、地上部を再開発するという計画です。その計画には歴史的建造物であるシュツットガルト中央駅の駅舎の一部を取り壊すことも含まれていました。鉄道の高速化や中心地の土地有効活用は将来的に有益かもしれませんが、これも巨額の費用と長期にわたる工事期間の不便さを伴います。結果的には、前述のノイス市の路面電車を調査対象とすることとなり、シュツットガルト中央駅は2010年に再訪したのが最後となっていました。

そうした経緯から、今回シュツットガルトを訪問する際に、フランクフルト空港駅からドイツ鉄道のICEに乗車し、その列車が真新しい地下のホームに入っていくことに想像を膨らませていました。ところが、到着してみると、以前と同じような地上の終着型の駅でした。ただし、駅舎とホームの間は巨大な工事現場となっており、駅舎の玄関口に出るために長い仮通路で迂回するようになっていました。仮通路には、Stuttgart21の経緯や将来像の写真やイラストがたくさん掲示されていました。もう完成しているだろうという期待が裏切られたとの思いと同時に、いったんは事例として調査したプロジェクトを継続して追ってこなかったことへの反省の気持ちを込めながら、仮通路に掲示されたパネルの全てを写真に収めました。

今回ホテルに到着し、ドイツ内外からやってきた友人たちに会い、私は15年ぶりの訪問で新しい中央駅が完成していると期待してやって来たと言うと、「あと15年かかるよ」と冗談のように言われたのが印象的でした。これまでドイツのいくつもの都市にでかけましたが、中央駅はその都市の顔とでもいうべき重要なスポットです。将来への投資とはいえ、完成には程遠そうな様子に残念な気持ちになりました。

この20数年、研究の進展に伴って、扱う事例も手法も私にとっては変化してきています。ドイツ・ノイス市の路面電車移設の事例は、市民投票や調査結果の内容を踏まえたシミュレーションゲームとして教材開発し、時代と空間を超えて当時の問題を議論できるように発展させました。そのゲームは決して色褪せることなく、大学の講義で学生たちは、目の前の課題に対して現実の人々の暮らしを想像しながら、生き生きと議論を重ねています。

日本においてもリニア中央新幹線など巨大プロジェクトの長期化と予算の巨大化の問題を抱えています。社会を変えていこうとする際に、将来の便利さと引き換えに、現状の不便さを受け入れなければならないという問題に私たちはどう向き合っていけばよいのでしょうか。これまで扱ってきた事例の答え合わせから未来を展望する必要性を強く感じた今回のドイツ訪問でした。